

COMPASS

答えの無い問いを探していく。そんな時代だから目指す方位を指し示すものが必要だ。そのようなものに私はなりたい。

全国学力・学習状況調査を活用した学校の取組

「ちばっ子の学び変革」の検証協力校として、全国学力・学習状況調査の分析・活用を通して学力向上に取り組んでいる15校のうち、2校の校長先生にインタビューをさせていただきました。それぞれの学校での取組の中には、皆さんの学校においても学力向上につながるヒントがあるはずです！

記述式問題への苦手意識克服に向けて！ 八街市立八街中央中学校

——日頃、生徒の皆さんは、どのような様子ですか。

生徒は非常に落ち着いています。学力については二極化していることなどが課題だと感じています。

——数学が中心になるかと思いますが、今年度、学力向上について重点的に、どのようなことに取り組みましたか。

記述式問題への取組を重点的に行いました。具体的には授業内で問題を説明する活動を入れたり、定期テストにおいても記述式問題を積極的に導入しました。

——そのような取組を行うに当たって、全国学力・学習状況調査をどのように活用しましたか？

分析結果を基に、生徒の実態や課題を把握し、課題については職員全体で共有しました。記述式問題の正答率や無解答率などの分析結果などを、授業や定期テストの改善に向けて活用しています。

——具体的にどのようなことを意識して取り組んでいるのでしょうか。

例えば、授業やテストで記述式問題を取り扱う際には、1問ごとの配点を低くすることや複数の問題を作ることで、「答えやすい問題」を用意するなど、解答欄が空欄にならないような問題作りを意識しました。

——なるほど。生徒自身が達成感を得られるようにするために、スモールステップで取り組めるようにしているのですね。



八街市立八街中央中学校
杉山 辰夫 校長先生

実際に取り組んでみて苦労したことは、どのようなことですか。

単元によっては図に直接書き入れる問題を作成するなど、記述式問題については工夫が必要でした。

——どのようにして困難を打開したのですか。

数学科の先生方で意見を出し合いながら問題の作成を行いました。

——先生方の協力体制は不可欠ですね。

そのとおりです。第1学年は3人の先生方が指導にあたり、練習問題や単元テストの作成を分担して行うことで、生徒はより多くの問題に取り組むことができました。放課後に定期的実施した補習においても、個に応じた指導を行うことができました。

——第2学年や第3学年では少人数コース別の授業も行っているようですね。

生徒の学び合いを中心に学習を進める「学び合いコース」と、数学を苦手としている生徒を対象に、学習内容の理解・習熟に向けて復習や繰り返し学習を多く取り入れた「じっくりコース」の2コースを設置しています。単元ごとに生徒の実態に合わせて、メンバーを入れ替えながら効果的な指導を目指しています。

——その他に学校の体制として取り組んでいることはありますか。

教科主任や進路担当で週に1回学力向上委員会を実施し、各教科・学年の実態把握に努めています。また、記述式問題については、数学科以外の教科においても定期テストで出題するなどしています。

——取組を進めていく中で、変化したことなどはありますか。

先生方が授業中に記述式問題を取り入れたりと、生徒が発表する機会を設けたりといったことを意図的・計画的に行うように変化してきました。

記述式問題に解答する生徒の割合が増えてきていることから、一定の成果を得られていると思いますが、これからも全校体制で生徒の学力向上に取り組んでいきたいと思っています。

—児童のみなさんは、日頃どのような様子ですか。

仲間と協力して行う学習に意欲的に取り組んでいます。自ら既習事項と結び付けて課題解決に向かうことや学力の個人差が大きいことなどが課題だと感じています。

—学校の取組の中で、特に手応えを得ているものは、どのようなものですか。

朝と昼の「スキルアップタイム」と授業での習熟の時間の確保です。

—「スキルアップタイム」とは、どのような取組なのですか。具体的に知りたいです。

朝と昼に10分ずつ学習に取り組む時間です。主に朝は宿題の確認や直し、昼は授業中にやり残してしまった内容や習熟のためのプリントなどの学習に取り組んでいます。

—どのような効果を実感していますか。

家庭学習が少しずつ習慣化されるようになってきました。昼のスキルアップタイムに、午前中の授業で学習した内容を振り返ることができるようにするなど、各担任が工夫しています。その時間に授業内容についての理解が深まることで、家庭学習にも意欲的に取り組んでいるようです。今までは、家に帰っても授業の内容が思い出せず、家庭学習に手がつかなかったこともあったようですが、学習の好循環が生まれているように思います。

—なるほど。確かに学習した内容を児童が理解した上で家庭学習に臨むことができれば、より効果が高くなりそうです。

「授業時間内に課題が終わらず宿題にする…」という点については2年間で大幅に改善されてきたと実感しています。

—授業ではどのような工夫をしていますか。

本校では、「見いだす」「自分で取り組む」「広げ深める」「まとめあげる」というプロセスに「使ってみる」という過程を追加しています。また、単純にこのプロセスをこなすのではなく、児童の思考に沿って柔軟な授業デザインを行っています。単元などの特性も踏まえ、単元内で「見いだす」を2回行う授業もあります。そういった工夫をすることで児童が「習熟」する時間を確保して、自分で課題に取り組めるようにしています。



南房総市立白浜小学校
宇山 進一 校長先生

—児童の学習の様子はどうか。

学習問題やまとめなどを自分の言葉で考えて記入するといった授業での取組の成果もあって、主体的に自分の力で問題解決に取り組む児童が確実に増えています。

—先生方には、どのような変化がありましたか。

校長、教頭、研究主任などで組織する研究推進委員会、教務主任、特別支援担任、専科教員で組織する学力向上チーム、その他にもICT部など、学校全体で取り組む体制づくりを心掛けています。全国学力・学習状況調査についても、結果や課題を職員間で共有するだけでなく、実際に職員で問題に取り組み、問題解決の質のモデルとして共有するなどしています。

学力向上の成果としての手応えを感じることはなかなかできないといった苦労はありますが、習熟の時間を確保するためにも、45分の授業をどのように組み立てるかを強く意識した授業改善に取り組んでいます。

また、ICTの活用などもそうですが、新たな取組を先生方の間で広めるなど、チームとしての強みが発揮できていると思います。

「みんなでできた」「自分もできた」という日々の積み重ねを学力向上につなげるための研究を行ってきました。これからも一人でも多くの児童が達成感を持てるような授業や全校での取組を行っていきたいですね。

2校とも学力向上に向けて結果分析を有効に活用するとともに、全校体制で学力向上に取り組んでいることが成果として表れていますね！

この2校を含む「ちばっ子の学び変革」推進事業の検証協力校である県内15校の取組については、県教委ホームページでご覧いただけます。右の二次元コードからアクセスしてみてください。

